



Malcolm ANDREWS,
Dickensian Laughter: Essays on Dickens and Humour
(xii + 195 頁, Oxford University Press,
2013 年, 本体価格 £20.00)
ISBN: 9780199651597

(評) 井原慶一郎
Keiichiro IHARA

本書は、1991 年以來 20 年以上にわたって *The Dickensian* の編集長を務めてきた著者によって書かれた待望の新刊である。ディケンズに関する研究書としては、*Dickens on England and the English* (1979), *Dickens and the Grown-up Child* (1995), *Charles Dickens and His Performing Selves* (2006) に続く 4 冊目の著作となる。

「笑いとユーモア」(以下「笑い」と表記)は、ディケンズ文学の本質と言ってもよいほどの重要なトピックであるにも関わらず、それに関する研究書は意外と少ない。著者はその例外として、James Kincaid (*Dickens and the Rhetoric of Laughter* [1970]) や John Carey ('Dickens' Humour' in *The Violent Effigy* [1973]) を挙げているが、出版から 40 年以上(残念ながら、吉田孝夫『ディケンズの笑い』[1982] および『ディケンズのユーモア』[1984] への言及はないが、それでも 30 年以上)が経過している。この空白期間の原因は、著者が言うように、研究者がこれまで 'the serious Dickens, the darker Dickens' (viii) ばかりを強調してきた結果なのかもしれないし、また「笑い」について分析的に論じることの難しさに由来するのかもしれない。あるいは、一般読者がディケンズを読んで笑うことは当たり前すぎて、わざわざ研究者が論じる問題とは認識されてこなかったからかもしれない。しかし、著者が指摘しているように、The Graphic Novel 版『クリスマス・キャロル』(2008) の解説に(いかにレベルの低い [?] 解説とはいえ) 'Dickens Fact' として "Dickensian" = denoting poverty, distress, and exploitation, as depicted in the novels of Charles Dickens' (viii) と書かれているのを見ると、さすがにディケンズ研究における「笑い」の軽視を見直す時期に来ているのかもしれないと再考を促されるのである。

本書の趣旨は極めて明快である。'How does Dickens make us laugh? — that is what interests me here in this sequence of essays.' (ix) 本書の副題は、'Essays on Dickens and Humour' だが、この 'essay' はその原義である「私的な試み」に近い。

なぜなら、本書の方法論は、基本的に‘reactive’なものだからである。‘By and large I have picked out extracts from Dickens’s novels, stories, journalism and letters that make me laugh, and then explored ... how he has done it.’ (ix) 素材の選択が恣意的であることが本書唯一の弱点かもしれないが(例えば、Kincaidの場合は作品ごと・年代順になっている)、ある程度は仕方がないだろう。問題はそれをどのように分類・整理するかである。本書は、(主題とその変奏とでもいうように)一つの主題(‘Dickensian Laughter’)をめぐる(アプローチの角度の異なる)7つの‘essay’から構成されている。その基調となるのは、‘Pickwickian Laughter’である。

第1章‘Opening a Fresh Vein of Humour’では、最初の長編小説『ピクウィック・ペイパーズ』(1836-7)に焦点を絞り、この作品のユーモアのスタイルがいかに画期的だったかについて述べている。まず、常軌を逸脱した大げさなファルスの「笑い」ではなく、日常生活のなかの「笑い」をスケッチ風に描いたディケンズのリアリズムが挙げられる(10)。さらに、この点とも関係するが、前時代の「笑い」——例えばWilliam HogarthやThomas Rowlandson(*The Tour of Dr Syntax in search of the Picturesque* [1812])に見られるような粗野で猥雑な笑い——とは異なる、より‘genial’な笑いが1830年代以降(ヴィクトリア時代)のスタンダードになっていったが、『ピクウィック・ペイパーズ』はその嚆矢となった(13-14)。より正確に言えば、その執筆・連載過程において変貌を遂げた『ピクウィック・ペイパーズ』は、旧時代の「笑い」の伝統と新時代の「笑い」の機軸の架け橋となったのである(18-19)。

第2章‘Staging Comic Anecdotes’では、‘comic anecdotes’を語る際のディケンズの技法——(舞台上で演じられているかのように)目の前に見えるように語ること(27)——が論じられる。目の前に見えるように語るディケンズの技法は、もちろん‘comic anecdotes’に限定されるものではないが、視覚的に再現された形而下的細部(例えば、人物のちょっとしたしぐさ)こそが効果的な笑いの誘発剤となるのである。本章のエピグラフ(‘he looked at all things and people dramatically’)が示す通り、ディケンズは日常のコミカルな出来事を舞台上の‘drama’に模して表現することを好んだが、この‘drama’とはCharles Baudelaireが「誇張法の眩暈めまい」(「笑いの本質について」、ちくま学芸文庫版『ボードレール批評』1, 239頁)と評したEnglish pantomimeにほかならなかった(阿部良雄訳では「無言劇」と訳されているが、よくある勘違い)。

第3章‘Comic Timing’では、「笑い」におけるタイミングの問題を扱う。聴衆の面前で公開朗読を行なうディケンズは、‘stand-up’コメディアンに喩えられるかもしれないが、書かれたテキストにおいてはどうだったのだろうか。著者は『クリスマス・キャロル』(1843)の冒頭で語り手が「前説」よろしく読者に語り

かけ、作品世界のなかに引き込む技法、および登場人物のモノローグ (Pecksniff, Mrs Gamp, Micawber, Podsnap といった ‘soloist’ たち) や会話 (ずれの生じた ‘cross talk’) や行為における絶妙なタイミングの技法 (テンポ, 繰り返し, リズム, 情報の伝え方) を詳細に検討している。

第4章 ‘Laughter and Incongruity’ では、ディケンズ文学の「笑い」の鍵となる要素である ‘incongruity’ について論じている。まず、‘incongruity’ を中心とした「笑い」の理論の数々 (Herbert Spencer の ‘descending incongruity’, Arthur Koestler の ‘bisociation’, 現代の認知心理学の ‘incongruity-resolution’ 理論など) が紹介され、次にディケンズの作品や書簡からその具体例が示される。特に筆者が注意を向けるのが、語りのレベルの ‘incongruity’ (bathos, travesty, burlesque) である。さらに、『デイヴィッド・コパフィールド』(1849-50) や『大いなる遺産』(1860-1) の語りの構造 (一人称の語り) における ‘incongruity’ (「自己の二重化」) が考察される。Thomas Carlyle の有名な「ユーモア」の定義 (‘True humour springs not more from the head than from the heart; it is not contempt, its essence is love; it issues not in laughter, but in still smiles, which lie far deeper’ [97]) から明らかなように、両作品における「笑い」のモードは、アイロニーというよりは、ユーモアである。



第5章 ‘Falling Apart Laughing’ では、Jacques Lacan の「鏡像段階」(寸断された身体/統一された〈私〉) と Mikhail Bakhtin の「グロテスク・リアリズム」(グロテスクな身体像) の理論を手がかりに、‘Buttoned-up Self’ と ‘Fragmenting Body’ の間の軋轢 (これも ‘incongruity’ の一種) から生じる「笑い」(デイヴィッド・コパフィールドの酩酊の場面 [Chaper 24] がその典型例) について論じている。ディケンズが描いたのは両者 (‘Order and Anarchy’) のせめぎ合いであって、両者は一人の人物や複数の人物において奇妙なバランスを保っている。

第6章 ‘Laughter and Laughters in Dickens’ では、これまでとはかなり視点が変わり、作品のなかで描かれる笑いそれ自体、すなわち笑いの表象が考察対象となっている。『クリスマス・キャロル』のスクルージの甥の笑いの描写に典型的に見られるように、ディケンズ作品において ‘hearty laugh’ は周りの人たちへの「伝染性」を持つ「善いこと」として描かれているが(これ

と対照的なのが、悪意ある人物たちの押し殺した笑いである）、それは必ずしもヴィクトリア朝社会の中流階級のモラル・スタンダードではなかった。むしろそれは一般的には避けるべきものとされていたのである。その行き過ぎた言説の一例として、George Vasey の *The Philosophy of Laughter and Smiling* (1875) —— のちに優生学と呼ばれるような観点から退化の徴候としての「笑い」を厳しく批判した書 —— が挙げられる (130)。現代の私たちにとって、「笑い」のセラピー的な効果は常識の一部であり、ディケンズ作品における ‘hearty laugh’=「善」という図式も違和感なく受け取ることができるが、それとは異なる ‘social climate’ のなかに作品を置き直してみると、そこに描かれた「笑い」のラディカルさやメッセージ性が強く浮かび上がってくるのである (本書評執筆中 [2014. 8. 7] に、トルコの副首相が「女性は公の場で大笑いをすべきではない」と発言したことに対し、数百人規模の女性がソーシャルメディア上で公の場で笑う自らの画像を流す反撃を加えたというニュースを目にしたので記しておく)。他に 1790 年代に発見された「笑気ガス」についての言及や「笑い」の音声の表記法 (‘Ha, ha, ha!’) についての考察もある。

第 7 章 ‘What Made Dickens Laugh?’ では、タイトル通り、「何がディケンズを笑わせたか」(その多くはディケンズ自身が体験した逸話的なもの) が明らかにされる。特に ‘solemnities’ や日常の何気ないことのなかに「笑い」を見出す(後者の場合にはそれを誇張法で語る) ディケンズのユーモアのセンスが (Sigmund Freud の「ユーモア」論 [1928] とともに) 紹介される。ディケンズが自らの創作物に対して(創作中に)笑ったことは、いくつもの証言から明らかだが、そうした「笑い」とディケンズが日常生活のなかで見出した「笑い」との境界は曖昧であり、性質のうえではほとんど違いはなかったと結論づけて本論は終わる。

‘Dickensian Laughter in a Popular Dark Age’ と題された Afterword では、第 6 章で提示した ‘social climate’ の問題に再び戻り、「笑い」の持つ社会的機能について論じている。本書で最も多く言及された「笑い」に関する理論書は、Henri Bergson の *Laughter: An Essay on the Meaning of the Comic* (1900) だが、そのなかで Bergson は、‘Laughter ... does not belong to the province of esthetics alone, since unconsciously (and even immorally in many particular instances) it pursues a utilitarian aim of general improvement’ (本書では下線部のみ引用, 177) と述べている。「笑い」には、「社会的からだの表面に機械的のこぼりとしてとどまっていそうなものをことごとくしなやかにする」機能(岩波文庫版『笑い』林達夫訳, 27 頁)が備わっているのである。この「のこぼり」を緩和し、社会の成員たちに「できるだけ大きい弾力性と高い社交性」を獲得させることが ‘a part of Dickens’s agenda’ (177) だったと著者は述べる。ディケンズ文学の「笑い」がたんなる娯楽ではなく、政治、経済、

家族制度，教育，宗教といった多方面において，‘social climate’を変革する‘dissident’な力を備えていたという指摘は重要である。

本書の成立のもととなったのは，著者が所属するケント大学の MA コースでの講義（‘Dickens and Comedy’）であり，確かに本書の読後感は，7回の良質の講義を聴講したような印象というのが率直な感想である。著者は控えめに，‘At all events, if the analysis is not to the reader’s taste, then the book can bid fair to be a tempting anthology of hilarious passages from a master humorist. My hope all along has been to make the reader laugh and also reflect on his or her laughter’ (ix) と述べているが，本書で提示された7つの視点を今後どのように発展させていくかは，読者に任されていると言えよう。その意味でも，本書は，ディケンズ文学の「笑い」について学ぶための最適の入門書である。